特　集

統合移転計画の実施と東広島地区の開校

頼　實　正　弘

はじめに

頼實でございます。よろしくお願いします。ただいま小宮山さんからお話がありましたように、三つの柱といいますか、工学部の学部改革の理念と実践、それから統合移転計画の変更と実施、ここまではいいのですが東広島地区の開校とおっしゃった第三点目がどうもぼやけているんですね、私自身には。なぜかというと私が学長の時に工学部の移転がありまして、それからあとこないんですよね、ずっと。だから東広島地区の開校といっても工学部が開いただけで、あとは一〇年間なかったんじゃないかと思う。それはあとから申し上げると致しまして、一応その線に沿って話を進めていきたいと思います。

資料を用意してもらったんですが、その前に若干申し上げておきたいのは、私が見たら広島大学の一番目玉は大学院の改革ということであったと思うんです。昭和四八（一九七三）年の二月に統合移転を決定しております。これがすべてでありまして、これから広島大学の移転も大学の改革もスタートをしたというふうに私は見ております。当時は飯島（宗一）学長でありまして、飯島先生が文部省との間で覚書（「広島大学の統合移転に伴う改革整備計画について」）を交わしておられます。これを我々通称井内メモと言っておりまして、昭和四九年に出ておりますし、これは確か学内通信に載っていると思うんですが、それがまず基本であります。広島大学が移転し、また改革をするについての柱は、中心はここにあります。で、大学院については「原則として各分野にわたって博士課程を設ける」というこの一行が非常に効いておるわけです。これに従って工学部の改組は行われました。そうして昭和五二年に博士課程の設置をみるわけであります。これをうけて竹山（晴夫）学長による大学院整備構想（「広島大学大学院整備構想について」）というのが、いわゆる一〇・二三案、これは用意していただいておりますのでご覧いただくといいと思うのですが、一〇・二三案というのがありまして、一つは「人文・社会科学系については、人文科学系と社会科学系に二分し、それぞれを整理する」と、二番目に「人文科学系のうち、既存の文学研究科は従前通りとし、同研究科に総合科学部の人文科学系を基礎とした学術博士を授与する専攻を設

ける」。二番目の一行が非常にひっかかって、ひっかかったというか文学部の方で気にくわなくて、ずいぶんこれで私はいじめられたわけでございます。文学部の教官が心配なさったのは、伝統的な小講座がつぶされるんじゃないかというのが一つ、二つ目に多数の総合科学部の教官が文学研究科の構成員となることで、研究科委員会の合議体制がそこなわれ、研究科の運営に支障をきたすではないかということ、もう一つは総合科学部側の原案は学問的必然性に乏しいではないかという三つの点です。比較文化専攻という名前によってこれを大学院として実現させようとして、二度三度と文学部の教授会に出かけてはいろいろと話をしたわけですけれども、学部自治であるとか学問論とかいうことを聞きましてですね、長い長い堂々巡りのお話を承ったりして、私は文学系の先生方はこういうことをやるのか、私自身が工学部出身のものですからてんでかみ合わないという状態ですね。大学院構想というのが私の時には非常に挫折した状態になりました。しかし、あとで結局、理科系というか薬学専攻と生物圏科学研究科という一専攻と研究科ができるわけですけれども、ともかくそういうことでですね、文科系の人はこういうことを考えるのかと、よく私には分かったわけです。

その頃ですね、昭和五九年だったと思うのですが、広島大学が大学教育研究センターで「高等教育の変化する機能と革新の意義」というテーマのセミナー（第二回ＯＥＣＤ高等教育日本セミナー）をやりました。このセミナーに招待した方がハンカーダウンと言う言葉をおっしゃったんですね。これはその当時のアメリカの大学の改革が生き残りの論理という泥沼にはまっておる。この論理は大学を悩ますいろいろな問題をしゃがみこんで困難が行き過ぎるのを待つ、じっと待つ、これをハンカーダウンと言うそうなのですが、既存のものにしっかりとつかまってひたすら困難が通り過ぎるのを待つといった感じなのでしょうが、壺に入った蛸と同じで壺から出してやろうと逆さにしたり、揺さぶったり、一生懸命やりますとますますしがみつくという。この時、私はこれを聞いて文学部の先生達は自分の学部のことしか考えてないじゃないかというふうに感じて憤慨していたんですけれども、統合移転を計画した時点では大学全体が良くなろうということであったと思うのですが、それがなかなか進まなかったという苦い苦い経験を持っております。

一、工学部の改革

工学部の改組当時の工学部長であった津田（寛）先生、もう亡くなりましたが実にきちんと物事をおやりになる方で、『広島大学工学部七五周年記念誌』に「大学院の充実と工学部改組」という文章を書かれています。これを見ながら、どんな状況であったかということを振り返ってみたいと思います。

私は昭和一三年に広島高等工業に入学しました。昭和一三年に募集された学生の数は機械が四〇、入学してふたを開けてみると我々の機械科のクラスだけ七五名になっているんです。つまり、三五名の増募がこの年から始まったんですね。あの頃の競争率が二〇倍なので、こ

れは落ちたと思っていたら入っていたのでおかしいなと思っていたら、倍ほどとられていた、そういう経験をしております。その翌年は工作機械と教員養成各四〇名の募集が新たに始まりますし、電気と応化に三五の増募をやったわけですね、次の年から。ですから、学生の数が一気に三三五で倍になったわけです。昭和一三年の入学は一五〇人プラス三五だったんですが、一四年には三三五名という学生が入ったという状況でありました。その当時の先生が言っておるんですが、この頃の会計制度ではすぐ仮校舎が立ちました。つまり受験料が全部大学、その当時は専門学校ですが、受験料が全部使えるという状況だったんです。だから志願者が多い学校はそれでずいぶん潤ったということだったようであります。そうしてすぐ増募用の校舎が運動場に建ったんです。それから昭和二〇年に市立の工業専門学校ができております。これは機械科、航空機科、工業経営科でできたのですけれども、みなさんご存じだと思うのですが、勝盛（豊一）先生が校長先生でおいでになっております。工業会の名簿で昭和二六年の卒業生の数をひろってみました。そうすると、だいたい機械が三〇ぐらいで、教養の機械が四四です。電気が三九、化学工業が三七、だいたい三〇くらいがずらっと醗酵、造船。市工専では、土木と工業経営。途中で航空が土木に変わるんですね。合計三四九名の卒業生が昭和二六年に卒業しておりまして、卒業生は二五九名と百名減っているという状況です。

それで私、昭和二六年に工学部に籍をおきましたので、その辺のことは分かると思うのですが、修士課程を昭和三八年に設置するわけですが、この次は博士課程だということで歴代の工学部長が一生懸命それに向かって努力を続けておりました。修士課程というのは、新制大学の工学部では昭和三八年に初めて広島大学と横浜にできたわけです。工学系では当時はあと、名工大と静岡と神戸なんです。これが修士課程のできる発端でありまして、以下続々といろんなところにできてくるわけです。工学部自身としては昭和四四年の当時、実は文部省で調査費を計上してもらってドクターができるところまで行きかけていたのが、紛争で不渡りになったという苦い経験をここで一つ持っているわけでございます。

若干、大学紛争のことを振り返ってみますと、もう大分古いのでお忘れかとは思いますけれども、昭和四三年に日本大学と東京大学で大学紛争は起こったわけです。日本大学における紛争の直接の原因というのは、幹部教授の脱税事件から大学の使途不明金の存在が明らかになったことで、九月にその問題をめぐり学生集団と総長の大衆団交、いわゆる団交というやつがもたれた。東京大学では医学部の研修医問題が発端になり、六月には安田講堂が占拠されるという事態が生じました。この頃紛争した大学は五〇を越えております。東京大学の占拠は昭和四四年の一月一八・一九日の機動隊導入で解かれたわけです。一九日に解かれて、二〇日に文部省は東京大学と東京教育大学の昭和四四年度の入学試験を中止するということをやったわけであります。

このしわ寄せを各大学分けてとれということで、またこれがもめる種になったということなんですけれども、広島大学では、教養部学友会が主力の学園問題全学共闘会議、いわゆる全共闘と言っておりましたが、これが出した八項目要求が発端になって紛争が起こりました。

一方、全学連というのが別にありまして、民青系でございますけれども、この連絡会議というのもありまして、民主化の要求をかかげておりました。全共闘は評議会団交や学長団交をやれやれと盛んに言ってきて、何回かの団交を開いたわけです。当時の川村（智治郎）学長は健康上の理由から辞任され、三好（稔）教育学部長が学長代行になりました。全共闘との団交はトラブルがあり、なかなかかみ合わず実りあるものは何もなかったんですが、全共闘は二月に教養部を、続いて大学本部を封鎖しました。正門、南門、北門に机を積みまして、バリゲートを築いております。この頃から評議会も本部を出まして、原医研（原爆放射能医学研究所）でやったり、あるいは工学部の会議室で、あるいは広島銀行の大手町支店の会議室を使った。それから比治山の料理屋の〝フセヤ〟とかいうのがありますね、あそこの部屋を使ったりということで、襲われるのを避けて転々と動いたという記憶があります。私もこの頃評議員でありまして、今度はどこにいくんじゃろうかと一つは楽しみでしたけれども、そういうふうな状況でした。入学試験は学内でできませんので、いろいろなところにお願いして、小学校やら中学校やらで行いました。工学部はですね、五日市の工業大学の附属工業高校にお願いしたら貸してやるということで、そこで入学試験をやったのを思い出します。

あれやこれやとやっていたんですけれども、初めて大学問題検討委員会準備委員会というのが評議会の中にできました。この副委員長が飯島先生だったんですね。やがて飯島先生が学長になられまして、昭和四四年の入学式は吉島公園でやっております。そうして昭和四四年の八月一七・一八日に機動隊を入れるわけであります。私たち、前の晩機動隊を入れるということで大学の側の旅館に泊まっておりますと、いよいよ機動隊が明日は入るぞと言うとる。ワーワー言う中で、あぁもう分かっておるじゃないかという状況で機動隊を一七日に入れました。その時ですね、実は一七日では六階建ての本部全部は排除しきれなかったんですよ。上から火炎瓶を投げるは投げるは大変なんですね。で、結局二日かかりました。一七日は結局、側を固めるだけで本部の建物にはよう近付かなかったですね。一八日の一日で朝六時半から攻めて一一時頃ですか、もっとかかったかな、ようやく攻め上がったということなんです。そうすると上には火薬工場ができておるんですね。火炎瓶製造工場です。私が化学工学だったものですから、理学部化学の山本勇麓先生、二人だけが化学だから機動隊が攻め上がるのについてこいと言うわけですね。化学工学という名前がついているものですから、ともかく他の人よりは分かるということで、山本さんと二人で火炎瓶を投げつけられながら進んだのを覚えてます。ま、そんな勇ましいこともあったんですが、東京大学が冬の陣なら広島大学のこの攻防は夏の陣というようなことを、その当時は言っておりました。

その前に大学問題検討委員会の答申によりまして、改革委員会というのができました。私は三代目の改革委員長をやらされた。私の前は羽白（幸雄）先生、初代委員長は竹山晴夫先生でした。初代・二代の委員会が非常に精力的に「仮設0」「仮設I」というものを出しております。そういう建議・答申・報告を初代・二代の改革委員会が頑張ってたくさん出しておりましたので、私が三代になった時にはもうやる

ことはありませんで、ただ、それをいかに具体化するかという方向が仕事であったように思うんです。教育体制の中では主として一般教育の改革が言われておりますし、研究体制、それから事務機構問題についても討議して覚書に纏まっておると思います。そうして昭和四八年（正しくは昭和四七年一二月）に「統合移転・改革のための暫定的管理運営機構についての建議」という建議を学長におこなっております。その四代目の改革委員会で終わりになりまして、以後は改革委員会から基本計画委員会へとバトンタッチ致しました。概略的に言いますと、広島大学の拡充整備計画というものでありまして、具体的には新キャンパスで統合移転を行うこと、学部間格差をなくし、全領域に博士課程を設置することというのが改革委員会の骨子であったと思います。

工学部におきましては、佐藤（静一）工学部長があと半年の定年までにやってもらおうと思ったら、この方も辞任されまして丸山（益輝）工学部長が登場するわけです。彼は意欲的に動きまして確か初代の大学教育研究センターのセンター長だったと思う（正しくは第三代大学教育研究センター長）。四層会議を設置致しました。この四層というのは教授、助教授、助手、職員という四層、これを四層と言ったんですけれども、四層会議を作りまして、工学部長、それから評議員の選挙規程も変えております。大きく変わったのはですね、工学部長でも評議員でも候補者を選ぶには、職員まで入れた全教職員でもって四名を選出して、そのあと教授会でそれぞれ工学部長であり、評議員を決めるというシステムにしたんですね。先程、学長室で聞いていたら、ごく最近まで工学部でそうやっていたらしい。今はやってないそうですが。それと教授会に議長制をいれまして、議長、副議長を学部長とは別に作ったわけです。これで私は工学部長をやっておりまして非常に助かりました。工学部長は居眠りしておってもいいというわけでもないんですが、議事運営について客観的にみることができましてですね、非常に助かったのを覚えております。これは脱線ですけれども。

ともかく先程ちょっと高等工業の話で申し上げましたように、あの頃学科としては昭和二八年には確か九くらいだったんですね。それをですね、機械系、電気系、化学系、構造系の四系という構想をたてるわけですね。もともと機械、電気、化学、醗酵だったんですけれども、それがうんと言ってくれませんで、新制大学に博士課程の設置なんてもっての他だというような、けんもほろろの文部省の厚い壁にぶつかりましてですね、容易に突破できなかったのであります。

丸山さんが中国へ主張中に急死致しまして、急遽四八年二月に津田（覚）先生が工学部長になるわけです。そして飯島先生が口癖のように言っておられたのは、抜本的現実的改組案を作って持ってこい、と。分かりますか。抜本的現実的改組案を作って、そして博士課程の設置に向かって邁進せよっていうわけです。そういうふうなことでありまして、これが四八年の二月なんです。津田さん工学部長になっておりますね。ちょうど津田さんが「奇しくも」と書いておりますけれども、大学の統合移転を決めたのも四八年二月なんです。西条へ移転することが決まっております。このときに「東広島へ統合移転を目指す広島大学」というパンフが四九年三月に出ておりまして、統合移転なるものの定義が、定義といったらあれなんですが、統合移転をどんなふう

に考えておるかということにイントネーションをおいて取り上げております。ですから、文部省もこの方針を了解しているということでございます。

しかしながら当時の雰囲気としては、学部の運営は民主的に、情報は公開を旨とすることは当然のこととといたしまして、大学紛争の余波もありまして、人心は若干、疑心暗鬼、不安定な状況にありました。ただ他の大学の動きも多少気になりまして、特に連合大学院という構想が持ち上がった頃でございます。

工学部長は文部省の意向を打診し、工学部の歴史的展開の舵とりをやることに努力を致しておりますが、新任で挨拶を兼ねて文部省の大学課長を訪問して、このときも若干、いろいろと探りを入れたようでございます。帰ってこれからやること等をいろいろと四九年の井内メモを柱にどういうふうにやったらいいかということで、工学部に将来計画委員会を作りました。たいていなら各科から一名ということで出すんですけれども、学部長指名を作るわけですね。というのはどうしても学科から一名というと学科の利益代表になって纏まるものも上手く纏まらない。というようなことで概算要求というのを五月中に纏めておりますが、年度によって重点的にやることが決まっておりまして、大学として一番最初にこのときやりましたのは、実は総合科学部をつくるということが工学部のドクターより先にいっちゃったということが一つございます。ですから四九年には、つまり四八年五月の段階では総合科学部の創設というのが出てきたわけであります。これが四九年度の概算要求ですから、四九年に総合科学部ができるという流れになるわけですね。工学部の改組というのはなんぼ早くても五〇年というふうな形で進むわけです。しかし、この頃から四八年六月の段階で纏める必要があったということでして、この時できるのが一次案なんです。それともう一つ、連合大学院っていうのが、実は中四国地区の大学の工学系が連合して大学院を作ろうという流れがここにあったわけです。これが四九年一月までに三回くらい会合をやっております。連合大学院で進もうという流れが一つ、工学部としては広島も中四国地区の一つのメンバーですから、それにも顔を出さなくてはならない。まだ自分自身じゃ単独にやりたいことが心の中にありますから、それはそれとして今度は五大学の流れがあったわけです。そういうあっちに顔を出してこっちに顔を出してということで、非常にこういうものをつくるのはずいぶん難しいんだなぁということを感じておりました。

この頃、実は工学部の講座数を見ますと、新制と旧制の違いは皆様ご存じかとは思うんですが、まず五大学の講座数を調べてみますと、名工大はだんとつに大きく一〇五講座持っておりましたが、あと横浜、静岡、神戸、広島というのはだいたい似たようなもので五三か四くらいの講座数しか持ってないんですね。つまり、旧制の約半分しか講座数がありませんで非常に格差が大きかったということでございます。

それでこれから工学部がどんなふうに考え、どんなふうに動いたかと申し上げるわけですが、工学部の基本構想と致しましては、「進歩・発展の著しい工業化社会に対応して広い視野と基礎学力を身につけた技術者とハイレベルの自主的研究能力を持つ人材を養成するための学部・大学院の教育研究体制を刷新充実することを目指す」というつも

りで参りました。学科としてはこの時点では一一学科ありまして、その一一学科を最初に考えました四系列によく似ているのですけれども、ともかく電気系、機械系、化学系、建設系という四つの類に再編し、それに共通講座を加えて工学に関する教育を重視する。大学院については博士課程を設けるというようなことでございます。

発足当時は機械工学、電気工学、工業化学、醗酵工学、工業経営学、船舶工学、土木建築七学科だったのですが、昭和三四年に私の所属しております化学工学科が増設となりまして、このとき工業化学は応用化学と名前を変えます。三六年に精密工学科が増設となり、このとき土木と建築が別れるわけです。四二年に電子工学ができます。工業教員養成課程というのが各科に二名ずつの配属、これは昭和二七年に既にできておりますけれども、各科二名ずつの学生が養成過程として配属されました。それとは別に三年制の工業教員養成所というのが三六年にできまして、四四年に廃止されております。三年制は学士号をもらえないんです。このようにして昭和三八年に大学院の修士課程ができたわけですけれども、そのできた時の講座の模様はこのプリントの資料（『広島大学工学部七五周年記念誌』一七・一八頁）にあります表一の方に修士課程を作った時の形が出ておりまして、ご覧のように機械でいいますと機械工学科で講座が六で学生六〇名ですね。学生数が四四五というふうであったわけですね。これをですね、第一類というのは実はその次の表二と一緒に見ていただければいいんですが、ともかく第一類というのは科としては機械工学、精密工学を合わせて、第二類は電気、電子、経営工学で第二類を作って、第三類というのは応用化学、醗酵、化学工学で第三類を作り、第四類は船舶、土木、建築で第四類と言い、あと共通講座というふうな組み立てを作りました。

そして大学院はどういうふうにしたかというと、今度は多少違うのですが、線の結び方が研究科との結び方はそうですね、表一の方にございますね。材料工学というのは実は表二と見比べてもらうと、機械材料は機械科から、電子物性というのは二類の電気からというふうに二講座ずつが集まって、だいたい二講座ですね。その組み合わせで専攻を作ったわけです。その大講座と書いてますもう一つ右に教育科目と書いてあります。この教育科目というのはご存じだとは思うのですが、これが昔の小講座なんですね。これにはだいたい、一、一、一で教授、助教授、助手が張り付いておったんです。第三列目に書かれておるいわゆる教育科目はその当時にあった、まだ改組前にあった、あるいは昇格前にあった修士の時の講座なんですね。それに新たに新設改組されて加える予定なのがもう一つ右の講座なんです。つまりどういうことかというと小講座、修士の場合には一学科というのは四講座学生四〇名というのが原則なんです。教官としては教授一、助教授一、助手一という形で四〇人の学生を修士までは教育してくださいというのがこの頃の文部省の考え方なんです。それがドクターになりますと六講座で四〇名の学生、つまり学生をこの体制で五〇〇名とれということになったわけです。しかもこの頃、旧制大学を調べろと文部省が言うんですね。教授一、助教授一は良いけれども助手は一・五じゃあないか、二おらんよと。だからお前のところが作るのは一・五しかとれない。だから一、一、一・五しか配当しないぞとなっちゃったわけ

です。そういうので五〇〇名の学生定員ということでわり算をするわけです。そうすると五〇〇を四〇で割ってそれに六をかければ講座数が出るわけです。それを計算しますとだいたい七五ですか。ですから五二年にスタートした時点では、教授がこの計算だけでいくと七五、助教授が七五、助手が一二三か四くらいになるんです。ところがこの時、共通講座が七講座として加えられたわけです。ですから七五足す七で八二の教授、助教授というのが基礎になったわけです。

それにもう一つですね、こういう類体制で学部を運営するということについては、類の運営、管理運営ということで一人教授が張り付いた方が良い、類内の一般管理事項の担当ということで教授を配当してくれと言ったんですが、その方が通らなくて、工学基礎をやると盛んに言いましたので、工学基礎をやるために類に一人ずつの教授を配当をしてくれたということで、結局、教官の配当としては、八六の教授に八二の助教授、一二三の助手という数字が割り当てられました。ドクターの学生は何で四三になったのか忘れました。マスターの学生は一五〇くらいだったと思うんですね。それから学部の学生は五〇〇というふうな数字であります。

工学基礎と申し上げるのは、流体力学、熱力学、それからエレクトロニクス、移動速度論と材料の科学、これを工学基礎と考えておりましてこれらの科目を基礎として工学部は学んでおるということであります。つまり、昭和四五年の時点で教授、助教授が五六、五六であったものが五二年の時点で八六、八二ですね。その講座の教育科目は先程申し上げた表の右覧に書いてあるのが殆ど加わりまして、どえらい膨張になったということがお分かりだと思います。三〇何講座いっぺんにどかっと来たということです。平成七（一九九五）年のデータがございましたので、それを見まして言うと、教授が九三で助教授が八八で講師が一で助手が一〇四となって、これはたぶん教授、助教授がもっていかれたんでしょうね。助手の定員を。計二八六という数字がありまして、昭和五二年の二九一より減っている。何か定員削除でもあったんですかね。

二、統合移転

この辺でそれじゃあ統合移転のことについて入りましょうか。統合移転のことは、これはその次の門田博知さんが書いている「西条への移転決定から研究・教育施設の移転完了までの経緯」（『広島大学工学部七五周年記念誌』）が非常に参考になると思います。

広島大学は昭和四八年二月に西条への統合移転を決定致しましたが、それ以前の昭和四四年の一一月頃に、分散しているキャンパスを統合して教育研究の充実を図る必要があるという改革委員会の提言を受けて、評議会にキャンパス問題を中心として検討する将来計画特別委員会というのが設置されました。大学の移転先や移転に関わる時間もその当時の社会的背景と深く関わっておりまして、当時広島市は周辺市町村との合併を進めていました。広島大学が移転に必要とする一〇〇万坪の使用可能な土地は持っていなかったんですね。大学紛争で本部キャンパス周辺の住民に多大の迷惑をかけて、例えば舗装煉瓦をはが

して投げるとか、夜中にマイクで大声をあげる、紛争の悪い状態が大きくクローズアップ致しまして、大学は厄介者として受け止められるような状況でありました。東京教育大学を廃校にして新しく新構想大学という言葉が出てくるわけですが、新構想大学として改革した筑波大学とは違いまして、広島も新構想大学と言われたのですが、広島大学の場合は通常の教育研究を継続しながら統合移転をするということでありまして、統合移転の完了までに当初期待されていたよりずいぶん長い期間がかかっております。昭和五七年の三月に第一陣として工学部の移転完了ですが、平成七年三月学校教育学部の移転完了まで教育・研究施設の移転完了が一三年、昭和四八年の移転決定から数えると二二年かかっております。

西条への移転決定の経緯を見ますと、昭和四七年の夏頃から工学部においても全教官が集まって大学の立地条件とか敷地面積について討議を致しておりまして、北大、東大、筑波大と見てくるうちに一〇〇万坪がいるじゃないかという一〇〇万坪構想になったわけですね。昭和四五年の一二月に設置された将来計画特別委員会のキャンパス問題小委員会は、候補地探しを精力的に進めまして、翌年一二月に二四の候補地を公表致しました。その後このうちから一三を選んで更に検討を進めました。四七年一月に設置されたキャンパス用地調査委員会が可部と五日市と西条の三候補地について地形の模型を作り、敷地造成から防災にいたるまで検討致しました。私も可部も五日市も見に参りました。可部及び五日市の候補地は広島の中心部から一五㎞くらいでありましたが、自然環境をできるだけ保存しながら造成するというと地形上の制約のため、どうしても五〇から七〇万坪くらいしかならないんです。取れるところが。一方、西条は広島市の中心から四〇㎞離れてますが一〇〇万坪はとれると、とれそうであるということでここに決まるわけですが、西条はご承知のように比高一〇〇ｍくらいの山が三つありまして、このふもとしか造成できそうになかった。一部には葡萄畑がまだありまして自然地形を大きく改変しなくても当面の敷地は造成できる状況にあり、県道馬木・八本松線に接していたと。学内においても西条町は遠すぎるので可部町や五日市町を支持する教官もいたし、広島湾の埋め立てによって土地を造成できないかとか、広島市が進めている西武流通センター用地を転用するのはどうであろうか、本部と工学部の用地を高度利用するなどの様々な意見がありました。その頃、これまでの検討結果について説明が行われております。更に新キャンパス建設費用は六三haの跡地処分の費用でまかなうというのが条件の一つで、これは閣議了解というんですがね、これがなかなか悩ますんですね。キャンパス用地調査委員会で意見の調整もなかなか容易ではなかったようです。広島大学の統合移転を決定する時期があともう少し遅れておったら果たして西条に決まっていたかどうかと門田さんもあやうんでおられましたが、私もそう思います。

西条移転については、距離が遠いだけでなく、上水道や下水道がまだ未整備、交通の不便さについては県や地元が果たして整備してくれるのかどうか、これら基盤整備の問題がありまして、十分関係官庁と打ち合わせて、整備については確信がなければならない。これが西条移転を決定するための条件であるということでありました。広島県は

太田川の水を西条に送るための広域水道を計画して、西条町は広島県と共に流域下水道か都市下水道を整備することになりましたし、また交通問題についてもバス路線の新設に努力すると共に西条駅から大学キャンパスまでの修景道路を整備することになり、広島－西条間は既に東広島バイパスが都市計画決定されておりまして、西条の東から国道二号線バイパスの工事が進められておりました。これらの道路と共に山陽自動車道の整備を進めることなどが協議され、関係官庁の協力が得られることがだいたい明らかになったので、西条に決定したということなんです。この時点で学長は基盤整備の条件付きでこの決定を委任されてました広島大学統合移転地を西条にすることについて評議会の了承を得たのであります。ここに広島大学の西条への統合移転が決定されたわけでありますが、医・歯学部は霞キャンパスに残るということであります。

賀茂学園都市の建設ということになったわけですが、昭和五〇年には広島県に学園都市課というのが新しく作られまして、広島大学の移転に関して東広島市を中心として都市整備を促進することになりました。建物を建てるためには、まず県の開発公社がキャンパス用地を先行取得しまして、地域振興整備公団に引き継ぎ、造成されたキャンパス敷地を文部省が購入して施設の建設を進めるというプロセスになるわけです。県と市が一体となって大学も加わって、用地買収交渉を進めるわけです。東広島市及びその周辺を含む賀茂台地の広域計画は、昭和四七年頃から始められました。地域振興整備公団は文部省の委託を受けてキャンパスの土地造成を行うことになりつつありました。昭和五〇年頃から賀茂学園都市建設構想の検討を開始し、これによって東広島市の都市つくりが提案されたのであります。この構想では自然環境の保全に重点がおかれ、環境アセスメントを踏まえた都市つくりが提案され、ＪＲ西条駅からキャンパスまでの修景道路、国道三七五号のバイパスの建設、西条第一区画整備、高屋住宅団地の造成、駅前広場及び周辺中心市街地の整備、上・下水道整備などの計画が立案され、東広島市は学園都市つくりの第一歩を踏み出した。

工学部の移転を第一番に致しました。移転する学部の中で一番重たい学部が工学部でありまして、重たいものから動かすのが妥当だろうという世間の常識に従ったんだろうと思います。時期的に、近い時点で移転した大学に東北大学があったんですが、工学部がやっぱり真っ先に動いております。それにこのときの工学部を見ますというと、博士課程の設置が昭和五二年に決まって、学部の学生数も講座の数も約五割以上アップして全く足の踏み場もないというか、狭隘これ極まれりという状況に工学部はあったんですね。それに基準面積というのが建てる時にあるわけです。それを見まして言うと、その当時工学部が研究教育の面積として持っていた倍以上になるわけですので、早く行った方が良いというわけです。少しでも早く行こうということであったと思います。私が工学部長の時にこの決断をしたんですが、五四年の七月頃だったと思います。そういうことで工学部が第一番に行くことになったわけでございます。工学部関係校舎の計画ならびに工学部移転計画の路線は既に引かれておりまして、移転の時期は昭和五六年七月から九月に決めておったんです。ところが跡地問題というのがござ

いまして、移転の費用は跡地処分でまかなうという閣議了解事項で広島市長荒木、私はこの人は憎んでも憎みきれない人なんですけれども、工学部ができる時に誘致するのに広島市が寄付しているんですね。その寄付したところをタダで返せと、跡地を処分して売った金で学部を移転しようというのにタダで返せということで、これは非常に抵抗致しました。これがあるものですから、なかなか文部省が予算を組んでくれないという非常に痛い目にあったんです。そういうのが跡地処分の問題なんです。

この移転の状況が『広島大学工学部七五周年記念誌』の中にあるんですが、建築の鈴木（充）教授が「工学部の西条キャンパスへの移転」という文章の中で、「移転の時期については苦い想い出がある。工学部は昭和五四年に移転の時期を五七年度中と定め準備に入ったが、五六年の半ばになっても工事の進捗状況がはかばかしくない。施設部に問い合わせると、三月に間に合わせるのはとても無理であるという。工学部の場合、移転時期は長期の研究計画の中に位置づけられているから、いまさら変更は不可能であると伝えたら、水もガスも出ないという。それなら水筒をもって通うから、とにかく年内に建物を完成させろ、と強く申し入れたら、そこまで言われるんなら何とかしましょうということになった。施設部も大変であったが、こちらも大変であった。仕事を急がせるため、週一回の割合で西条に打ち合わせに通い、建物は何とかできたが、水もなければガスもない。おまけに道路が未整備なため、泥沼のような状態である。路盤工事だけでもできないかと思ったが、下水工事が遅れているため、それも駄目である。ここまで来たら、もう後には引けないので、引っ越しを強行したが、よく事故が起きなかったと、今でも冷や汗が出るような思いがする。幸い何のトラブルもなく、天候にも恵まれて移転は完了したが、二度としたくない経験である。当時の構成員の皆さんの辛抱と研究に対する前向きの姿勢に、心から感謝する。」というふうに書いてありますが、全くその通りであります。

昭和五七年の二月に工学部の移転が開始されましたがキャンパス内の道路は舗装されていないし、このことは門田君の「西条への移転決定から研究・教育施設の移転完了までの経緯」に載っておると思うのですが、門田君が次のように書いてますね。「雨が降ると泥沼のようになった。長靴をはいての通勤が続いた。出入口にマットとブラッシュが準備され、廊下には一部厚紙を敷くこともあった。四月になって学生がきても、道路が舗装されるまで約一年間この状態が続いた。また、学生の宿舎も十分ではなかったので、周辺の農家にお願いして駄屋『農耕用の牛馬をいれるための建物で、通常中二階として使われている』の二階を改装して宿舎にあててもらったところもあった。移転当時はキャンパス周辺には殆ど商店はないし、西条での生活は学生、教職員をとはず大変苦労をかけた。用地買収や工学部からの生活用水の処理水の排水交渉に手間取ったこと、敷地造成後の確定測量も完成していなかったため第三類の建物には谷を埋め立てる必要があるなどのほかに、工学部の建物は規模が大きいので、鉄筋工も近畿方面からも応援をお願いする状態であった。昭和五七年の二月建物を完成させるのに精一杯であった。」

だいたい工学部の建物が五千㎡くらいありまして、私ここにメモっているんですが、金額的には初めに建った北側の一・二棟が三八億八千万、三・四棟で三九億三千万というふうな金額でありました。その年で施設費が一二億五千万、廃液処理が二億八千万という数字が、計九〇億六千万という数字がここにちょっと出ております。

これも門田さんの記事ですが、「教職員の宿舎に入居された方々の生活も大変で、ウグイスの鳴き声は聞こえるし、自然に恵まれ、静かで、空気もきれいだが、毎日キャンプ生活をしているようだと実状を披瀝しておられたのを聞いてどうしたらよいのかと頭を痛めたのを思い出す。その後すこしずつ付近の商店が充実したり、新設されていった。民間の学生宿舎も新設され、新しい宿舎に駄屋の二階から引っ越していく学生もでた。昼や夕方になるとチャルメラが聞こえていたのもいつのまにか聞こえなくなったら、ガソリンスタンドのところに中華ソバ屋ができていた。卒論の時期になると学生と国道二号線まで夜食を食べに出かけたことを思い出す」とあります。それから門田さんは「工学部が西条キャンパス移転の第一陣として移転し、生活面では大変であったが、その後の移転の遅れを考えると、研究・教育施設の整備が早くできたことは不幸中の幸いであった」というふうに、工学部早く行って良かったと一言だけ書いてあります。学部等の移転計画は工学部が昭和五七年三月に移転を完了しておりますが、生物生産学部をはじめとするその他の学部等の移転については、東広島市の公共下水道施設の遅れによって、昭和六〇年度までの移転完了が不可能になったことから、年次計画の見直しが提案されまして、生物生産学部の移転は昭和六一年の三月になるということで、ここで基本計画は原則として四年遅れとなる、移転完了が昭和六五年の三月になるということをここで決めております。それが更に平成七年までずれていったということですね。

跡地処分の金額的数字がありますので述べてみますと、跡地処分が八一三億。そのうち工学部のところが一四六、福山が一七六、本部が三六七で計八一三億という金をどう使うかというと、土地購入費が二九九億円、施設整備費が四七四億、設備費が四〇億、計八一三億円使うという数字が残っております。先程、工学部跡地処理問題については申し上げたんですが、広島市がタダで返せと言うもんですから、なかなかあとの金が出にくくなりまして、ずいぶんそのあとの学部長、学長も苦労されたと思うんです。つまり経常経費的に数百億の金が欲しいわけですよね。五年くらいでやろうと思ったら、二〇〇億くらいずつの金が。工学部が移る時は事実二〇〇億使ったんですから、これが八一三億だったら一〇〇億、二〇〇億というそういう数字をポンポンポンと続けてきてくれなきゃ移れないんですが、それがどれくらい来たかというとひどい時には五〇億くらいしかこない。あれ五〇億きたんかな、失礼、億の単位で来たのは覚えてませんね。数百万の単位でしかこなかったですね。ということで先兵役で参りました工学部は渡ったあとの橋を落とされたようなもので、工学部の人達は非常に冷や飯をずいぶん長い間、一〇年ほど食わされたということがありますね。

五五年三月に地域振興整備公団より工学部の予定地と生物生産学部の予定地七八ha購入済み。五五年に学生宿舎、生物生産学部、理学部

予定地四二haを購入、五五年の一〇月に北二棟の鉄筋が建ちました。五七年の二月に移転が開始されて、五七年の五月に広島大学の東広島地区の開校があったわけですね。五七年一〇月には既に工学部は移転しておりまして、このとき図書館の南の小さな山ですね、あの山が松茸山だったんです。五七年には松茸があそこでたくさんとれまして、噂はたちまち学内に広がって、たくさんの人がわれもわれもと押し掛けていってその松茸の恩恵に浴したんですが、翌年はその半分くらいしか取れなかったですね。三年目になるというと全然取れなくなった。丁寧に取れば松茸山として、もし誰か気の利いた人がいれば、見張り番でもいれば、今でも取れるはずなんです。そういうことがありました。

それから私は学長になる前に馬術部長をやっておりました。練習場は太田川橋の下の中国電力の発電所の放水管を埋めた四、八〇〇㎡の空き地だった。馬術部の移転のことを盛んに頼まれていた。それで移転計画で馬術部のことについてもちゃんと入れてくださいよとやかましく言われて、原田学長にもそのことを申し継いでおいたんですが、ようやく六千㎡ぐらいでしょうか、新厩舎と馬場の建設が平成一一年九月二六日厩舎開きをしました。実はこれをやるについては、総監督の田部百之介さんが国会議員に頼んだり、学長と掛け合ったりでずいぶん奮闘してくれて、平成一一年に厩舎開きをやった。

三、国際交流

移転のことが長くなりましたが、移転の次はですね、国際交流のことをちょっとお話ししてみたいと思うんです。私はインドネシヤに計七回ほど、ヨーロッパからの帰りにシンガポールから、中近東に行った時にシンガポールから、何でもかんでも南に回って帰ることをやりまして、努めて行って七回行っているわけです。一番大きな理由は、私がアメリカで二年ほど勉強させてもらったと、日本が発展途上国の時代、昭和二八年から三〇年くらいなんですけれども非常にアメリカにお世話になったと。二年とかいかなくてもせめて一年くらいは発展途上国に何だかの形でお返しをしとこうという気持ちが一番私の根底にはあったわけです。えらいかっこいいことを言いますけれども。それで、実はこんなことなんですよね。広島大学へ私が二六年にきた頃には、留学生、賠償留学生というのがおりまして、これは主に造船へきているわけです。つまり日本が戦争に負けた賠償責任で留学生を呼んでくるというのをやっておったわけです。この留学生は大使館が選考して外務省から文部省に回されて各大学に割り当てられるという形できておりまして、これは一方的で評判良くなかったんです。来る学生も無責任な選び方、選ばれ方をしておるので、決して良いとは言えなかったということもありました。そういう不平が高まった頃に、大学招聘の国費留学生という制度が昭和四八年頃だったと思いますが始まったんですね。私はこれを利用してやろうということでインドネシヤ、タイ、フィリピンの大学の工学部長あてに留学生を送りませんかという手紙を出したんです。残念ながら一名の応募も得られませんでした。そういうこともあったんですが、しかしそれなら会いに行こうということで、ヨーロッパなりどこへなりへ行った帰りには寄ったと

いうことです。

そこにもう一つ用意していただいたのが「七五年の一こま」（『広島大学工学部七五周年記念誌』）という私が書いたやつなんですけれども、これは「広島大学インドネシヤ分校をつくりたい」というサブタイトルなんですが、どういうことかと言いますと、昭和五七年になりますとインドネシヤに対する有償協力は九千億円くらいの借款で、これは日本がＯＤＡで出しておる金額の一〇分の一に相当する、しかも一番大きい国なんですね。更に一〇〇億円くらいの賠償と合弁事業が四億八千万ドルくらいあるという状況でありましたから、工学部におって、とにかくインドネシヤを狙って一つ留学生はそこから招くことをやろうじゃないかということで、工学部の先生がその方へ行くたびに寄ってくれということを言っておりました。昭和五一年頃にはアハサヌジンの大学やら、あるいはスリビジャヤ大学、五二年頃は北スマトラ大学、インドネシヤ大学等々うちの先生が大分寄ってくれたんです。そういうこともありました。

それからもう一つですね、この「七五年の一こま」というのを読んでいただければ分かるのですが、昭和五〇年に文部省の海外学術調査で「技術移転実施に関する研究調査」というのを申請しましたら、文部省が何の気まぐれか当ててくれたんですね。吉田先生と佐々木先生と三人でインドネシヤに出かけるわけです。その時、実はインドネシヤにはいわゆる学術会議みたいなLIPIというのがありまして、こいつが目を光らせていて、なかなか入国するのに大変だった状況をそこに書いておるんですけれども、申請書には写真を八つも貼ったりしてですね、半年前に申請書を出したんですが、大使館を通じて調べるとようやく番号がついて許可が下りておると言うんですが、こっちの大使館に行ってこのことを言うとまだ番号が来ていないというふうなことを言って、なかなか取り合ってくれなかったというような苦労をさせられたんです。そういう苦労をしながらジャカルタに参りましたが、着いた日が金曜日だった。金曜日はイスラムの休日なんです。だからもう仕事が終わったから来週の月曜日に来いということで、金曜日から三日間ぽかんと空くようなことになってしまいました。それで、ジャイカの事務所がヌサンタラビルにあったということで、そこへ行って、吉田先生の知っている方がいらして、そこの英語の分かる秘書を貸してくれまして、なかなかかわいい子だったんですが、ベティーチャンというその人と一緒に月曜日から警察や内務省を回るというようなことをやったんですね。そうすると向こうの役所は担当者がいないから駄目だと言うんですね。担当者がいないんだったら代理がいるだろうと付いてきた女の子に言って貰った。そうすると渋々仕事を始めるという調子で、本当に私は期待していろいろと仕事をしようと思ってやってきたのに、全く向こうの言葉で言うとプーランプーランと、のんびりと仕事をやっておる状況にはいささかくたびれたんです。

それはそれとして、私は自分の仕事としては蒸留という、つまり早く言えば焼酎を造る、原料からウィスキーを造るといった方がいいかな、アルコールの蒸留なんかを仕事の一つのテーマとしてやっておりました。バリ島へ行った時に、バリ島の焼酎と言いますか、蒸留酒はどんなもので造っているかというのを調べたんですね。原料はココナッ

ツのジュースを発酵させるか、あるいは米から作るかですね。蒸留したアルコールのことを、中近東からインドを通ってインドネシヤにかけて全部アラックという。日本でも蒸留酒をアラキ酒と呼んでおったようですけれども。そういう蒸留酒をつくる装置も傍らに調べに行ったんですね。すると、インドネシヤで独立戦争の時に非常に活躍したTAIRA（平良）さんという人がいて、その人がそういうことを詳しいから、そこへ行ってその人に案内してもらえということで、その人を訪ねて行くわけなんです。そうすると、何でもないような普通の民家なんですが、竈がありまして、竈にかかっておるのが蒸留機なんです。どういうことかというと、餅をつく時に米を蒸す釜がありますよね、一番下が釜でその上に簀の子を張って枠をつけて米を入れて、もう一つ簀の子を張ってその上に鍋みたいな米を蒸す時のいわゆる甑みたいなもの、一番下に釜がかかってその上に簀の子をおき、米を入れて上にお湯をかけたら甑ですよね。その甑の写真がそこに入っていると思うのですが、その甑の一番底の所へ発酵した原料のトアを入れ、そして下から炊くわけです。そうすると一番上にかけた鍋の底で蒸発して上がってきたアルコール蒸気が冷却して滴下する。それを溜めて外へ引っ張り出す。そういうふうな形で蒸留しておるんです。それを見に行ったんですが、実はおもしろい言葉「ベロン」という言葉があるんですが、先程申し上げましたように米を発酵して作った酒がベロンです。インドネシヤ語では人のことをオランといって、たくさんおるとオランオランと言うんですね。同じようにベロンというお酒をたくさん飲んだらベロンベロンと言う。こりゃあ日本語じゃあないかと、日本語のベロンベロンはこっから来たんじゃないかと私は今でもそう考えておりますが。そういう状況でインドネシヤに行くわけですが、これも留学生を呼ぶことに非常に役立ったわけです。あれやこれやして、とにかく結局、確かに回った効果があったということを思わせるのは、昭和四九年には留学生が五八名でインドネシヤから三名しか来ておりませんでしたが、昭和五八年頃になりますと留学生全体も一五〇名に増えているんですが、インドネシヤから二二名という他の増え方より格段にたくさん来るということが起こっております。

四、カナダの大学財政

インドネシヤのことはこれぐらいに致しまして、もう一つ残っておりますのでこれをざっとやります（頼實正弘「カナダの大学財政－オンタリオン州の大学経常費補助金算定方式を中心として－」『ＩＤＥ－現代の高等教育』二五五、一九八四年）。これは何かと申し上げますと、実は昭和五八年に文部省から行かないかと誘いを受けて、カナダの政府の招待で、平野さんという東京大学の学長で、福田さんというのが筑波の学長で、有江さんというのが北大の学長、それから柳瀬さんというのが上智の学長、城崎さんというのが関西学院の学長、この六人でカナダの八つばかりの大学を回ったんです。カナダという国は人口が二、五〇〇万人くらいで、八〇の大学と二〇〇のコミュニティカレッジがありまして、中等教育には約半数進んで、中等教育の学生が大学高等教育に進んでいるという、今の日本とほぼ同じような状況

に既にあったわけですね。ただし、学生の四〇％はパートタイムの学生だった。そこのところがちょっと構成のあり方が違うと、日本は殆どパートタイムなんてのはおりませんけれども、将来はこういうふうになるのかなと思っておるわけです。その辺の若干のデータを見ていただきたいんですが、実は広島大学を一番下のところ表二を見ていただくと私がその頃持っていたデータを使ってですね、大学の財源別収入と支出をカナダの方法で計算してみると、広島大学の値がだいたいカナダの大学とよく似た数字になるかなと思いながら貼り付けたんですが、そういうふうな数字になっております。人件費のところを見てもらうとそうカナダと違わないんじゃないかと思うわけですが、表一はこれはカナダの全部の大学の財源と費目というので、ちょっとデータが古いんですが、一九八二年の値が見られると思います。この当時のカナダで一ドルがだいたい二〇〇円。ですから広島大学のその当時の全収入を換算致しますと約一億ドルぐらいになっていると思います。一億ドルと言ったら二〇〇億円。今どれくらいか、似たようなもんですかね。

それともう一つこの表で見ていただきたいのは、実はカナダでは補助金の出し方なんですけれども、八〇何％が州政府と連邦政府の補助金になっている、八〇何％は広島大学の場合。多いのは七一％、やっぱり八〇％近くになりますね。これは私学でも州立でも全く無関係に同じような方法で補助金を計算しておるわけです。どういう計算の仕方かというとその次の方に分類一・二・三・四というものが書かれているものが学問の名前がいっぱい書いてありますが、これはつまり一般教養のコースで二学期で履修するフルタイムの学生が履修する一単位に相当するのをＢＩＵと言うんですが、Basic Income Unit と言いましてそのだんだん学年があがる、あるいは理系みたいにあるいは教育系みたいに実験や何やらいろいろあるのは少し加重値が二とかいうふうに大学院ドクターになると加重値が六になるいうなことで、ＢＩＵそれぞれの学科について、あるいは大学について全部計算して、足してですよ、その値に比例する数値で補助金を出すことをやっておる。私が勝手に広島大学がカナダにあったらどれくらいもらえるだろうかというようなことも計算してみたのと、それからその当時入手できたいろんな他の国立大学についても計算したのが表五なんです。こんなところに広島大学が貼り付けられるかというふうに見ていただいたら、一応、何かの参考になろうかと思って用意致しました。

ということであまり纏まった話もできませんでしたけれども、時間がぼちぼちきたようでございますので、一応この辺で私の話は終わりと致しまして質問をお受け致したいと思います。

（よりざね　まさひろ　比治山大学長、広島大学名誉教授、第六代広島大学長）

解　説

本稿は、平成一二年一一月二七日に事務局五Ｆ二会議室において開催した、広島大学五十年史編集室主催第一〇回研究会の内容を文章化

したものである。

頼實氏は広島大学工学部の前身にあたる広島高等工業学校（昭和一九年に広島工業専門学校と改称）を卒業され、創設の頃より広島大学に奉職された人物である。頼實氏の経歴等詳細については、退官記念誌（頼實先生退官記念事業会編『アジアへのかけ橋』昭和六〇年）に詳しいので参照されたい。

頼實氏が全学の運営に直接関わるようになったのは昭和四〇年代のことで、四四年には広島大学大学改革委員会大学院専門委員会、続いて広島大学大学院委員会の委員となり、五六年まで一〇年以上にわたり大学院問題に直接関わる立場にあった。

広島大学工学部は、戦後に新設された大学の例に漏れず、長らく大学院を持つことができなかった。全国に先駆けて修士課程を開設したのは昭和三八年であり、博士課程の設置については、他の大学に先んじているとはいえ、五二年まで待つことになる。頼實氏自身は講師に就任して間もない昭和三〇年に米国で修士号を取得し、博士号は三六年に母校東京工業大学において取得している。頼實氏は『アジアへのかけ橋』のなかで、課程博士号は「『研究者として自立して研究を行う能力を示す』運転免許証であるから、もっとどしどし出させるべきである」という考えであることを示している。遅々として進まぬ博士課程設置の状況を目の当たりにしていた当時からそのように考えていたならば、大学院整備の問題には一方ならぬ思いがあったろうと推察される。本文中にある中四国地区の連合大学院構想と、名工大・横浜・静岡・神戸との五大学で単独大学院をめざすという二つを同時並行する話は、その当時の立場を如実に現している事例といえよう。

広島大学の全学的な改革の推進役を果たしたのは大学改革委員会（以下、改革委）である。改革委は、「学長の諮問に応じて、広島大学の改革についての理念を検討し、構想をねりならびに改革の方針案を審議しおよびこれらに関し必要と認める事項を学長に建議する」ことを目的として昭和四四年五月に設置された全学委員会である。この委員会は大きく四期に分けられ、頼實氏が委員長を務めたのはそのうちの第三次改革委（昭和四六年四月～四七年三月）にあたる。第二次までの改革委は全学的な規模での改革案づくりに取り組み、さまざまな仮説や建議を公表してきた。これに対し、第三次改革委はその存在理由にいささか揺らぎが生じていた。なぜならそれまでの改革案を具体化するために、すでに評議会の下に各種小委員会が設けられ活動を行っていたからである。しかし研究体制、学生の居住問題、事務機構、地域社会との関係、連合大学院構想などの大学間交流の問題など、未解決の課題も多かった。改革構想を具体化していく段階の改革委を担当した頼實氏が、後に跡地処分の問題などにより最も重要な統合移転で足踏みをさせらることになる点は不思議な巡り合わせと思える。

国際交流の点に着目すると、頼實氏は他の歴代学長と同様、初代森戸学長の掲げた「国際性のある大学」の実現に努力された。頼實氏は修士号取得のために米国へ渡ったのを皮切りに、広島大学在職中に二〇回をこえる渡航をしている。その約半数が東南アジア方面であり、「発展途上国に何だかの形でお返しを」という頼實氏の情熱をそこから汲み取ることができる。本文中三三頁にあるとおりインドネシアか

らの国費留学生の招聘運動は失敗に終わるが、インドネシアからの留学生数はその後頼實氏が学部長や学長在任中に徐々に増加していくのである。これは頼實氏のまいた種が着実に芽吹き、実を結んだ結果ともいえるのではないだろうか。

ちなみにインドネシアからの留学生は昭和五〇年頃より漸次増加し始め、五〇年代後半以後は出身国別で常に上位三カ国に絡むようになっている。特に五〇年代半ばには留学生総数の二割をインドネシア留学生が占めており、当時の留学生数の増加に一役買っていたことは確かである。ここ一〇数年は中華人民共和国、大韓民国に次ぐ第三位に定着しており、平成一一年現在四八名（留学生の七・四％）が在籍している。

統合移転の経過について頼實氏は門田博知氏の回想録をもとに講演しているが、そのディテールについて二、三の誤りや説明不足が含まれている点には注意を要する。例えば本文中二九頁で「教育・研究施設の移転完了が一七年、昭和四八年の移転決定から数えると二八年」とあるが、前者の起算は移転の当初計画を評議会が定めた昭和五三年七月であり、後者はその五年前に遡るので正しくは「二二年」である。また、三〇頁にある賀茂学園都市建設のために新設された広島県の組織は、正しくは学園都市建設課であり昭和四八年に設置されている。その他の事項や工学部内での動き等については、今後の年史編纂の過程で検証していきたい。

最後になったが、職務の合間を縫ってお越し頂き、貴重な講演をしてくださった頼實正弘氏に改めて感謝申し上げる。

（小宮山道夫）

頼實正弘氏略歴および関連略年表

大正8・6・21　広島県安佐郡緑井村（現広島市安佐南区緑井）に生まれる。

昭和13・4・　広島高等工業学校機械工学科入学。

16・3・　広島高等工業学校機械工学科卒業。

17・17・26　海軍技術学生。

18・9・　東京工業大学化学工学科卒業。

18・9・30　海軍技術見習尉官。

19・3・1　海軍技術中尉。

20・4・1　広島市立工業専門学校（広島市東雲町）を設置。

21・6・　株式会社カネモ本店（愛媛県川之江町）へ就職。

24・5・31　広島大学設置。

25・10・1　広島大学工学部講師（非常勤）。

26・3・31　広島工業専門学校を廃止。

9・16　広島大学工学部講師。

27・4・1　工学部に工業教員養成課程を設置。

28・9・21　米国へ出張（昭和30年8月16日まで）。ライスインスティチュート大学院入学。

29・4・1　工学部に工学専攻科を設置。

30・6・　マスター・オブ・サイエンス（ライスインスティチュート大学院）

12・1　広島大学工学部助教授。

昭和34・4・1　工学部に化学工学科を設置。工学部工業化学科を応用化学科に改称。

35・4・1　工学専攻科に船舶工学専攻、土木建築工学専攻、工業経営学専攻増設。

36・4・1　**広島大学工学部教授。**
工学部に精密工学科、土木工学科、建築学科（土木建築工学科を分離）を設置。工業教員養成所を設置。

12・15　**工学博士（東京工業大学）。**
新制大学初の広島大学大学院工学研究科（修士課程）設置。工学専攻科は廃止。

38・4・1　工学部工業経営学科に生産工学講座増設。

39・4・1　工学部工業経営学科を経営工学科に改称。

40・4・1　工学部に電子工学科を設置。

42・4・1　**広島大学電子計算機運営委員会委員。**
東京大学が昭和四四年度入試の中止を決定、東京教育大学も体育学部を除いて中止。

43・5・1　**広島大学評議員。**

44・1・20　**広島大学長選考規程検討委員会委員。**
工業教員養成所を廃止。

3・18　昭和四四年度大学院入学宣誓式を分散で行う。学部入学式は行われず。

4・1　四月以来自宅待機の措置が取られていた昭和四四年度新入学生一、八七三名に対し、吉島公園においてオリエンテーションを行う。

4・9　警察力導入により、東千田地区の全ての建物の封鎖を解除（一八日まで）。

6・4　**広島大学大学改革委員会大学院専門委員会専門委員（昭和46年1月22日まで）。**
評議会に将来計画特別委員会を設置。評議会に大学問題調査室検討委員会を設置。

昭和44・8・17　**広島大学大学院委員会委員。**
将来計画特別委員会の従来の専門委員会を改組し、キャンパス問題小委員会を設置。

11・1　**広島大学計算センター運営委員会運営委員。**
将来計画特別委員会キャンパス問題小委員会が、移転候補地二四カ所を選定したことを評議会に報告。

11・11　評議会がキャンパス問題小委員会を解散し、新たにキャンパス用地調査委員会を設け、キャンパス用地に関し全学的協力を得て調査検討を開始。

12・1　評議会は統合移転について各部局から出されていた意見を評議会として文書の形で確認・記録すると決定。大学改革員会は「統合移転・改革のための暫定的管理運営機構についての建議」を学長に提出。

12・14　**学術審議会専門員（昭和49年12月31日まで）。**
飯島学長が賀茂郡西条町御薗宇地区に統合移転することを正式に決定・公表。

45・12・15

46・1・22

47・1・18

12・12

48・2・1

2・8

昭和48・2・12　広島県は副知事を本部長に「学園都市建設対策本部」を設置。

4・1　事務局に統合整備及び大学改革に関する事務を処理するため統合整備準備室を設置。県は賀茂学園都市建設の事務を処理するため土木建築部都市局に学園都市建設課を設置。

9・10　昭和五〇年度概算要求に際し、「中期将来計画」をもとに、文部省井内慶次郎大学局長によって「広島大学の統合移転に伴う改革整備計画について」（井内メモ）がまとめられ、今後の行政措置、将来構想の基本計画が明らかになったことが評議会に報告される。

49・6・7　教養部を改組し、総合科学部を設置。

8・2　地域振興整備公団が発足、賀茂学園都市など着手。

50・7・4　広島県が「賀茂学園都市建設基本計画」を発表。

7・8　広島市が工学部跡に市立大、本部には科学博物館や平和研等広大跡地利用試案発表。

7・31　**海外出張（タイほか三カ国、8月31日まで）。**

52・2・1　**広島大学工学部長。**

3・29　賀茂学園都市における広島大学用地の整備について閣議了解。

4・1　大学院工学研究科に博士課程を設置。

6・1　**産業技術審議会専門委員（昭和53年5月31日まで）。**

昭和53・7・11　評議会が「学部等移転年次計画」（昭和六〇年度移転完了）を決定、工学部が最初の移転部局に決定。

54・10・23　「広島大学大学院整備構想について」発表（一〇・二三案）。

55・9・9　評議会が「学部等移転年次計画」のうち、工学部及び生物生産学部の移転時期を変更。

56・5・21　**広島大学長（第六代）。**

7・1　**国有財産中国地方審議会委員。**

57・3・31　工学部が東広島市に移転を完了。

5・22　東広島地区開校記念式典を開催。

58・1・18　評議会が「学部等移転年次計画」を全面的に見直し、昭和六四年度移転完了に変更。

59・5・10　**大学設置審議会委員（大学設置分科会）。**

60・5・21　**退官（任期満了）。**

5・28　**広島大学名誉教授。**

61・4・15　評議会が「学部等移転年次計画」を昭和六八年度移転完了に変更。

63・3・31　生物生産学部が東広島市に移転を完了。

平成2・5・15　評議会が「学部等移転年次計画」を平成六年度移転完了に変更。